

泰国行脚日誌

水野克彦

一九九一年七月泰国 WAT PAKNAM に於いて南方上座部仏教の得度を受け、泰僧侶として九カ月の時を泰の僧院にて過ごす事が出来ました。

WAT PAKNAM に於いての雨安居では、泰語もわからず、南方上座部仏教の僧侶についての知識も少なくなつたばかりに回りの様子を見て感じ動いていた事を思い出します。しかし、この安居の三カ月間で泰僧侶の生活様式が一部ではありますが、身についた様な気がします。

安居開けには、タイ北部の都市 Chiang Mai (チェンマイ) Chiang Rai (チェンライ) Mai Sai (メーサイ) 泰南部では Krabi (クラビー) へ短期間ではありましたが、一人行脚を行なつて参りました。BANGKOK (バンコク市内) の僧院生活と地方の僧院生活を比べて見て一番に感じたことは、「地方に於いては、大変素朴で質素な生活をしている」という事を一番に感じました。

Chiang Mai の WAT Phra Sing (ワットプーシン) に於ては、トカゲ(体長六〇センチ)のま

る焼きをメーチ(尼僧)さんが料理してくれた事を始めとし、Chiang Rai WAT Prakeo (ワットプラケオ)では、日本人の僧侶が寺に来たと言う事で昼の食事のおかずを一品から二品へと急速変更していただいた事、又、WAT Phrathat Doi Suthep ワット・プラタート・ドイ・ステープ) WAT Doi Wao ワット・ドイ・ワオ) WAT Keew Koravaram (ワット・ケエオ・コオラバーラン)と各寺に於いて宿泊させていただいた際にいろいろな心遣いをしていただき、日本人でありながら南方上座部仏教の得度を受け、黄衣を纏っている私に対してタイの人々、僧侶の方々は、タイ人僧と同じ様に扱って戴き、また大変親切に指導していただいた事に私自身、タイの仏教の根強さ信仰心の強さに心を打たれ、また、日本の仏教に失なわれつつある何かを感じた様です。もし日本国内でタイ人僧が行脚していたら日本人々はこの様に

感じどの様な対応をすることでしようか。タイの人々の信仰心並びタイ仏教と言うものの生活様式化は、他の仏教国に負けないすばらしい物を持つている様な感じがします。それが何であるか未だ私には理解しがたいと言う事が現状です。

WAT PAKNAM での僧院生活が七カ月八カ月過ぎた頃、私の中で一つの考えが浮び上がりました。「泰国内を日本の禅僧が行脚・修行したら、タイの人々、僧侶はどの様に感じ、どの様な対応をするだろう。」と言う考えです。

約二カ月の間毎晩の様に考えました。上座部僧侶と禅僧とでは相違点が多すぎるからです。泰僧侶の黄衣(法衣・三衣)に対し、我が曹洞宗の法衣は黒色しかも三衣にあらず。泰僧侶が二二七の戒律を基本に僧院生活を送っているのに対し、禅僧の頼る所は人間性(僧侶自身)の本質と個人の判断に頼るものである。

また日本僧が使用している作務衣をどの様に説明するかである。日本では法衣の一種と見做されているが、タイ人・タイ僧侶から見れば作務衣は法衣にあらず私服と見る為である。いろいろな面で異質な点があり困難極まる事は始める前からわかっていたからです。タイ僧侶の姿のままで行脚すればいろいろな面で都合な事は知っているがそれでは、戒律の問題で行動範囲が決められてしまう事。また、一番に他の仏教国の僧侶姿を少しの人でも良いから知っていたが、事柄もタイでは必要な事ではないかと考えました。黒田方丈・育英会の皆様・善光寺の壇信徒の皆様のお顔が浮かび上がり、今日こうして泰僧侶として生活出来ているのも皆様のおかげではないか、「なぜ、そんな事を考える」「なぜ、いまさら日本の禅僧として行脚する必要がある」と私の中では反論も数多く出しましたが、泰で育英生として生活する一年間はこれからの

僧侶生活の中で二度とない時間であり、他の仏教を簡単に受けつけない泰国で禅僧として行脚する事は自分自身との戦いでもあり、また、タイの人々にも何かを感じ取っていただけのチャンスではないかと思ひ、残り二カ月間を日本の禅僧として行脚する事を決意いたしました。

泰僧侶の身分を捨て日本僧として行脚する事は、一歩方向を踏みはずせばただの旅になってしまう危険性を持っていますが、黒田方丈・育英会・壇信徒の皆様への期待に答えられる様、未熟者の私がどこまで出来るかわかりませんが、日本の禅僧としてはじない様がんばりますので宜しくお願い申し上げます。

平成四年三月十八日気温三十七度。ついに日本の禅僧として行脚する日がやって来た。

行脚の第一歩として、Kanchanaburi(カンチヤナブリー)に足を進めました。戦争中「泰緬

鉄道」建設に駆り出され病氣や栄養不足で亡くなった、連合軍兵士の眠っている地である。日本では戦争体験の風化が叫ばれているが、この地を訪れる人々の中には当時連合軍の一員として共に戦った人々、又旧日本軍として泰緬鐵道の建設にたずさわっていた人々の顔を目にします。Kanchanaburi War Semetery・Chungkai War Semetery の墓石数を合わせると八六七八にも及びます。いまでは当時の面影は少なくなっていますが、整然と並ぶ墓石に目をやると当時の過酷な状況を物語っている様に感じられます。

この地では戦争中、日本軍によって建てられた慰霊塔を中心に法要・供養を行ない、連合軍共同墓地に足をはこび、八六七八体の墓

慰霊塔と管理にあっているトンカンさん



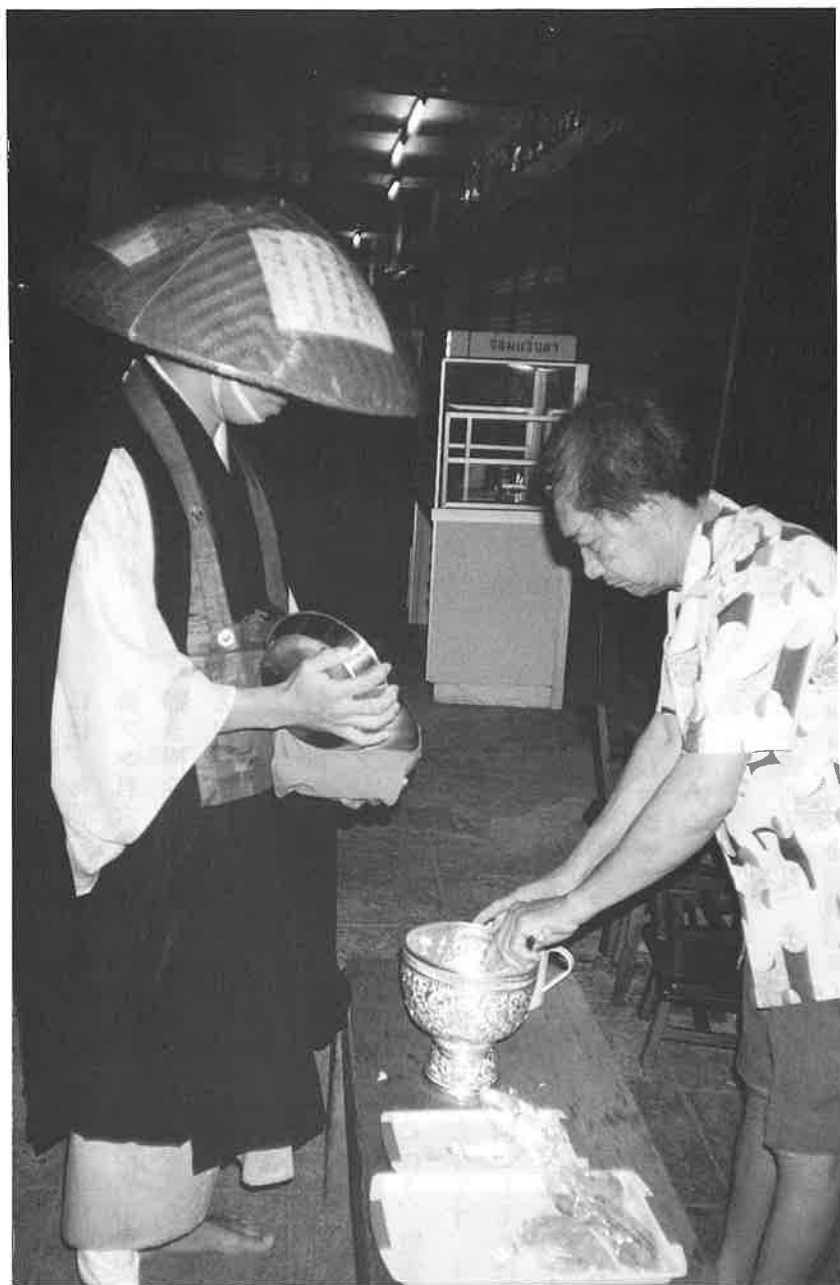
石一つ一つに御経を上げ供養する事が目的です。三月二十四日現在三五〇〇体の供養が終わり残り、五一七八体については四月上旬から行なう予定です。

日本人によって建てられた慰霊塔は、一年に

一度（三月に）泰国日本人会の皆様の手によつて法要が行なわれています。慰霊塔の管理には、タイ人のトンカンさん七六歳のおばあさんが行なっています。毎朝八時〜夕方五時まで一日中慰霊塔の敷地内の木陰の下で参拝の人々が来られるのを待つておられます。トンカンさんは日本人が慰霊塔に来ると、人数分の線香に火をつけ参拝者の方々に手渡しています。単純な事だと感じるかもしれませんが、毎日毎日、この夕イの暑い日差しの中をもう何十年も続けておられる事に対し、私自身驚きを隠せませんでした。トンカンさんに雨季の時は、どうするのですかと訪ねたところ、トンカンさんは「雨がやむまでトイレですわっているよ。」と言われました。日本の皆様にはタイの雨季の雨は想像もつかないと思われませんが、雨と言うよりもバケツの水を頭からかぶった様に降ります。時間にすれば一時間〜二時間位ですが、雨季の期間（約三カ月

間）ほとんど毎日の様に降ります。又、慰霊塔には、毎朝六時には近くに住んでいる子供、通称ブン君六歳、カー君七歳の二人の男の子が掃き掃除に來ています。このことは観光で訪れる日本人の人々の目には触れない蔭の奉仕となつています。この様に旧日本軍によつて建てられた慰霊塔は泰国日本人会の皆様、トンカンさん、ブン君、カー君、の人々によつて管理されています。この現状も、慰霊塔に行き、慰霊塔にて寝起きをしてみれば知つた事です。トンカンさん、ブン君、カー君に何かしてあげたいのですが、今の私に出来る事は、掃除の手伝いと、お勤めをする事が精一杯の事です。ちなみにカンチャナブリに於いて日本僧の私は、僧侶にあらず「忍者」と呼ばれていました。

平成四年三月二十四日、カンチャナブリの慰霊塔から一路、南部タイの町クラビーに足をば



タイ国で日本僧の姿で托鉢をする水野師

こびました。バンコク市内からバスに乗り約十
四時間で目的地クラブに到着いたしました。
この町には以前、泰僧侶の姿で行脚にきたこと
のある町でしたが今回は日本の禅僧の姿です。
町の人々は私を「何者だ」と言う様子で見ら
れている事が一番に感じ取られました。子供た
ちは以前に泰国内で放映された漫画の「一休さ
ん」と私が一致したらしく、私の事を「一休さ
ん」と呼びましたが、大人たちはやはり「忍者」
「侍」「腹切り」と僧侶からかけはなれた言葉で
私の事を話題にしていた様です。クラブの
WAT Keew (ワットケエオ)にての目的は以前
からお付き合ひのあるアーチャン(先生)プラ・
パラ・ス・テエプ師に協力をしていただき、
泰僧侶と日本禅僧のコンビでクラブの町を托
鉢して人々に日本僧を見ていただく事が目的で
した。寺に宿泊する件については住職プラ・シ
ユター・ウ・ウイスミス師からすぐに許可

が出ましたが、托鉢又は食事の面に関しては上
座部と禅宗とでは異なると言う事からなかなか
許可が出ませんでした。アーチャンの働きか
けでクラブの町を托鉢する念願がかないまし
た。アーチャンに日本僧の応量器(頭鉢)を見
せた所、小さすぎたためだと言う事で、タイ式
の鉢を貸していただき、又、托鉢の際はタイ式
にはだしにて行なう様に指導されました。

托鉢を終えた後に私に浮かんだ思いは「禅僧
としての私にタイの人々は手を合わせ、タイ僧
侶と同じ様に供養してくれた」事に対し宗教者
としてのよろこび、そして一条の光の様なもの
を感じた様に思われます。日本禅僧として行脚
を始め二週間、まだ始まったばかりですが、残
りの一カ月半を精一杯に精進弁道にはげむしだ
いです。

(平成四年三月三十一日)